

# 破魔台国大会 事前情報

## ①破魔台国

弥生時代に日本にあった一大国家。しかし、どこにあったのかが未だ判明しておらず、日本の歴史における最大のミステリーとして、今尚、盛んに研究されている。偽史倭人伝によると3世紀前半には中国からの使者が破魔台国の女王・破魔呼に金印を送ったという記載がある。

また、約30もの国を統治した倭国の都ともされている。

破魔台国の台は壺の誤写であり、正しくは「破魔壺国」という説が濃厚。

## ②破魔呼

破魔台国を統治していた女王。衝突を繰り返す国同士をまとめ上げ統治したとされている。

巫女のような存在であり、呪術・鬼道を扱う。天変地異を操り、人心を掌握した。

破魔呼の墓は「径百余歩」とされており、1歩1.4m程度なので、140m程度ではなかったかと予想されている。

径と記述されているので円形のものであると考えられ、古墳の形は円墳または前方後円墳でないかと言われている。

この墓も未だにみつかっていない。

## ③破魔台国大会

破魔台国が一体、どこにあったのかあーだこーだ言い合う大会。

とはいっても、プロもアマもごっちゃになって色々と言い合うので、その真偽よりもいかにそれっぽく、かつ、奇抜な破魔台国論の方が好まれる傾向にある。従来破魔台国論を研究するのはもっと偉い人に任せればいいので。

大会の会場は二大比定地として有名な近畿大和（奈良）と筑紫（佐賀・福岡）のちょうど真ん中ということで四国で開催されている。なんだそのシドニーとメルボルンの間だからキャンベラが首都みたいな理論は。

探索者はこの大会の午前の部の公開プレゼン参加者として選ばれている。（大会篇）

## ④比定

比較して推定すること。破魔台国の場所は情報不足な為、断定することができず、「ここだったと思われる場所」のことを比定地と呼ぶ。

比定地と呼ばれなくなったときに破魔台国論争の終焉である。

## ⑤金印

中国から破魔呼に送られたもの。「真偽倭王」を示すもの。見つければ一発で破魔台国比定の決定打となるが、未だに出土していない。

## ⑥下賜品

中国から破魔呼に送られたもの。金印もその一つ。

各種布や刀剣など様々なものをもらったが特に取り沙汰されるのが銅鏡100枚である。

他にも当時、まだ製銅・製鉄技術が進んでいなかった日本において、銅・鉄製の下賜品は破魔台国を比定する際の根拠として注目されるものである。

## ⑦放射性炭素年代測定法（C14法）

炭素の放射性崩壊のスピードを利用して年代を測定する方法。

出土品そのもの、あるいは出土品の周囲の土などから測定し、それがいつの時代にできた物なのかを測定する。

放射性炭素というのは大気圏で宇宙線を浴びた炭素でそれが二酸化炭素となり、植物に光合成で取り込まれたのち、再び宇宙線を浴びることがなく緩やかに崩壊していく……らしい。このシナリオ的には関係ない。

本来であれば専用の機械が必要な測定であるが、本シナリオではテンポを損なう為、鑑定に成功したら（手からC14法ビームが出て）年代が特定できることにしよう。

## ⑧偽史倭人伝

破魔台国の位置に関する以下のような記述が残されている。

『偽史倭人伝』一抜粋

從郡至倭、循海岸水行至零乃国、七千余里

(郡より倭に至るには、海岸にしたがい水行し、零乃国に至る、七千里余り。)

始度一海千余里至一乃国

(始めて一海を渡り千里余り、一乃国に至る。)

又南渡一海千余里至二乃国

(また南に一海を渡り千里余り、二乃国に至る。)

又渡一海千余里至三乃国

(また一海を渡り千里余り、三乃国に至る。)

東南陸行五百里到四乃国

(東南に陸行五百里、四乃国に至る。)

東南至五乃国百里

(東南に百里、五乃国に至る。)

東至六乃国百里

(東に百里、六乃国に至る。)

南至七乃国水行二十日

(南に七乃国に至る、水行二十日。)

南至破魔台国

女王之所都水行十日陸行一月

(南のかた破魔台国に至る。)

女王の都する所、水行十日、陸行一月。)

自郡至女王国万二千余里

(郡より女王国に至るには、一万二千里余り。)

この記述は破魔台国の位置を比定する上で最も重要な情報。

ただし、この記述には矛盾が多く、どこか記述が間違っているか、あるいは書き手の勘違いがあると思えない。

この矛盾こそが破魔台国の比定地が未だ定まらない要因である。

郡 (朝鮮)

— [海岸沿いに7000里] → 零乃国

— [海を渡り1000里] → 一乃国

— [南に海を渡り1000里] → 二乃国

— [海を渡り1000里] → 三乃国

— [東南に陸行500里] → 四乃国

～ここまでは間違いないとされている～

— [東南に陸行100里] → 五乃国

— [東に陸行100里] → 六乃国

— [南に水行20日] → 七乃国

— [南に水行20日・陸行1ヵ月] → 破魔台国

素直に読み解いた場合、太平洋に突き抜けてしまう。

しかし、小さな島であれば陸行1ヵ月が矛盾する為、該当する場所が存在しない。

一般的には、郡から四乃国までの行程は朝鮮の位置と島をいくつか渡ることから、ほぼ間違いないとされている。

しかし、五乃国以降はそのまま読み解くと明らかに太平洋へ突き抜けてしまう。特に最後の「水行十日陸行一月」が成り立つ場所が日本内に存在しない。

一里は現代における約4kmとは異なり、70mとも400mとも言われている。

零乃国から三乃国までの海の距離から計算し、1里≒100m弱と解釈されることが多い。

陸行は「陸上の移動」。山道なのか整備された道なのか不明な為、陸行1日は10kmとも40kmとも解釈できる。

水行は「海上の移動」。船の種類も不明ながら、天候に非常に左右される為、水行1日は5kmとも200kmとも解釈できる。

金印の授受については以下の記述がある。

今以汝為真偽倭王

(今、汝を以って真偽倭王と為し、)

假金印紫綬

(金印紫綬を假し)

裝封付帶方太守假綬

(装い封じて帶方太守に付し、仮りに授ける。)



## ⑨比定地候補

破魔台国の比定値はいくつかの有力候補とその他、無数の候補が存在する。

### Tier.1

#### ・近畿大和（奈良周辺）

有力な比定地の1つ。

比定の際には「南東読み替え説」を取る。

「南東読み替え説」とは、「南至七乃国」と「南至破魔台国」の南を東に読み替えて解釈する説である。

当時の中国の文献には、日本は九州から東北地方に向けて南に伸びていると誤解されているものがいくつか存在する。

なので偽史倭人伝でも同様に考え、南という記述はすべて、東北へ向けた方角・東と解釈する。

そうした場合、日本海または瀬戸内海廻りで計算すると距離的に近畿大和付近に至ってもおかしくないと解釈できる。

3世紀以後、日本の中心として栄えていた大和朝廷の前身として破魔台国があったと考えるのは極めて自然である。

その後の発展や莫大な量の遺跡や出土品を考えると決定的な証拠こそ見つかっていないものの、最も有力な比定地と言って差し支えないだろう。

#### ・筑紫（佐賀または福岡）

有力な比定地の一つ。

比定の際には「放射説」を取る。

「放射説」とは、四乃国以降の記述はすべて“四乃国からの距離”を記述してであると解釈する説である。

四乃国から東南に陸行100里で五乃国、……、四乃国から南に水行20日・陸行1ヵ月で破魔台国。

筑紫を破魔台国とする際には四乃国から反時計回りに水行し、上陸後に陸行、最終的に四乃国より位置的に南の位置にあると解釈。

または水行or陸行とも解釈する。

元々中国に近い為、有力視されていた比定地だったが、昭和の終わりに八野ケ里遺跡が発掘されてから、他の比定地よりも一つ頭有力度が上がり、現在では近畿大和説に並ぶ比定地である。

九州が破魔台国である場合、大和朝廷以外に日本に一大国家が存在したという意味でもある。

### Tier.2

#### ・出雲（島根）

「古事記」「日本書紀」によれば破魔台国よりも遙か昔、神話の時代には出雲が日本の中心であった。

多くの銅鐸が出土していることからここにも破魔台国または古代文明が存在したとしても不思議ではないだろう。

「南東読み替え説」を取れば、距離的にも不自然ではない。

#### ・吉備（岡山）

ここも古代に於いて栄えた国である。

巨大古墳文化が存在し、破魔呼の墓と呼んでも差し支えないものが多数ある。

ここも同様に「南東読み替え説」だが、他の比定地に比べると若干、根拠に乏しい。

### Tier.3以下

下北、栃尾、能登、登戸、諏訪、松山、伊野など全国各地、上から下までどこにでも破魔台国説は存在する。

ぶっちゃけ金印が出てこない限り言ったもん勝ちである。

